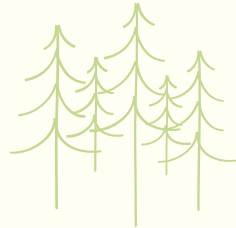


森の手帳から

山口耀久



山の森の小屋での滞在も、きょうで十日になる。そのあいだ雨の一日を除けば毎日せつせと散歩にでかけて、森の中にはもう新しい発見の場所もないようなものだが、いいお天気が、おとなしく私を小屋に落ち着かせてくれない。

むこうに見える、森の展望台のような岩山には二度登った。樹海に抱かれた湖の眺めが静かだった。そして二度目のときは、その下の凹地でカモシカに会った。別の日には、枯れたシラビソの幹でさかんにドラミングをやっているアカゲラも見だし、樹林の枝から枝へ飛び移っているリスたちも見た。

森の散歩では、そのほかにもまだ幾つもの邂逅や発見があったけれども、そういうことへの期待が、私の滞在を長引かせているわけでもない。地表の苔のいい匂いや、深い樹林の静けさが、いつも私をふしぎな魅力で森の奥へ誘い出す。

*

森の樹はときどき表情を変える。

太陽の強い直射をきらう黒木たちは、身を寄せ合って日陰の森をつくっているが、

それでも、梢を通って洩れてくる優しい光はきらいではなさそうだ。晴れた日には、その明るさを、どの樹もよるこんでいる様子が見える。幹や葉にまだらの光を受けながら、おたがいに無言の会話をたのしんでいるような様子させ見える。

山の空を雲が覆って、ふだんでも影のしずんだ森がいつそう影の濃さを増すと、樹はどれも不機嫌に押しだまって、森は重い沈黙に包まれてしまう。そんな時は鳥も鳴かない。一人で歩いている人間の心も重い。立ちどまると、むっつりと黙りこくった樹にまわりを取り囲まれていて、すこし怖い。

意地の悪い顔で、じっと私をにらんでいる樹もある。

*

湖に遊びに行く道の途中で、ウサギに出会った。はなれた距離で私をみつけたウサギは、一瞬キョトンとした表情で動かなかったが、すぐに跳びはねて、近くの樹の根元の穴に身を隠した。私は駆け寄って穴をのぞき込んだが、ウサギの姿は見えない。

苔の多い林床の土は見かけによらず厚みがなくて、下はでこぼこの火山岩だから、

そこに生える樹の根は浅く、まがりくねって、からみ合いながら横に伸びてひろがっている。ウサギの飛び込んだ根元の穴は、だから中が複雑な地下の迷路で、たしかにウサギにとつてこんなに安全な隠れ場所はない。

そんな穴を、しかし未練がましくのぞき込んでいる私を、ウサギはこっそりと見ていたかもしれない。私のがぞいている穴の奥からではなく、そことつながった、どこか別の穴の入口から顔を出して。